
ハムスターランド（私は何も見ていないシリーズ2）

きりもんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハムスターランド（私は何も見ていないシリーズ2）

【Nコード】

N1956G

【作者名】

きりもんじ

【あらすじ】

（シナリオです）信州のレジャーランドのホテルで小説を書いている若林は、ハムスターランドの少女と知り合う。彼女はいつも何かにおびえている。ある日彼女から父親殺害を打ち明けられた。それにはハムスターが絡んでいたのだ。（きりもんじ）

信州池の山ホテル

信州ビーナスライン、山道

1台のバスが走っている。

同、バス内

帽子をかぶり、Ｔシャツにジーンズ、
ボストンバッグを膝に抱え、
サングラスをかけた若林がいる。

同、蓼科湖

蓼科湖のバス停。

バスが発車する。

同、ピラタスの丘

ロープウェイのバス停。

何人かの客が降りる。

バスが発車する。

同、すずらん峠

バスが走る。

すばらしい景色が続く。

白樺湖、遠景

若林のN「僕は売れない小説家若林勝秀。

この夏、親友が支配人を務める信州

レジャーランドで歴史小説を書こうと思っている。

ところが不思議な出来事に巻き込まれて・・・」

タイトル

『ハムスターランド』

タイトルバック

白樺湖レジャーランド。

池の山ホテル、正面入り口、外

支配人の北山が待っている。

若林が現れ、北山の手招きで

裏の坂道へ回る。

坂道

北山と若林、並んで歩いている。

若林「すごいホテルだな。昔皇族も宿泊されたとか・・・」

北山「ああ、この一帯全部八島一族の土地で、今の社長

夫婦が一代でこのレジャーランドを築きあげたんだ」

若林「もつと上に女神湖という泉があるんだって？」

北山「女神湖も白樺湖も洪水を防ぐための人造湖で、

昔は一気に諏訪湖へ鉄砲水だったそうだ」

若林「・・・・・・」

ペンション寮、入り口

薄汚れたペンションが見える。

白樺の林の中、草ぼうぼうである。

4 駆が1台止まっている。

北山と若林が歩いてくる。

若林「きたないところだな」

北山「そういうな、ただなんだから。」

温泉はいつでも入れる。食事は、社員食堂で食券を買って食べてくれ。

1食500円で食べ放題。寮に持って帰るやつもいる。建ったばかりの寮のほうだがな。ここには誰もいない」

若林「そうか。すごくいいところだな。感謝する北山」

白樺レジャーランド

北山「ただし、女人禁制だからな、これだけは守ってくれ。それと、人に聞かれたら支配人の弟だといってくれ。ジャーナリストということになっている。」

俺は夏のシーズンで忙しいから、このネームプレートをつけてどこでも自由に散策してくれ。車はあの4駆。これが車と部屋の鍵だ。自由に使ってくれていい」

北山、ネームプレートと鍵を渡す。
ネームプレートには北山と書いてある。

若林「弟の北山ね。ジャーナリストで取材中。なるほど」
北山「じゃ、俺は仕事に行く」

若林「おお、ありがとう。恩に着るよ、兄貴」

手を上げて北山去っていく。
白樺湖の景色がとても美しい。

寮、入り口、外

二階建てで20室くらいの白ペンキ塗りのペンション。
入り口のドアノブにプレートがかかっている。

プレートの文字

『立ち入り禁止！この寮は来年取り壊しになります。
注意！ - 北山支配人』

寮、風呂場、内

大きな浴場。こんこんと湯が沸いている。

若林、手を入れ。

若林「これはいい！」

寮、廊下

扉に『寮長北山』と書いてある。

若林「寮長ね・・・」

と言いながら扉を開ける。

寮、部屋、内

四畳半に押入れ、ストーブ、テレビ、小机があつて、隅に清潔な布団がたたんである。

若林「ヤッホー！これは最高。持つべきものは親友だ。

兄貴様様、できのいい弟になろう」

レジャーランド、内、早朝

ジヨギングする若林。

若林のN「池の山ホテルグループ白樺レジャーランドは、白樺湖東湖畔に展開する大型遊園地で、温水プールやボーリング場もあり、スキー場も充実していて1年中にぎわっている。特に夏休みはすごい人だ」

同、遊戯エリア、早朝

ハムスターランドの大型看板。奥がお化け屋敷。手前が輪投げのスペース。

ジヨギングする若林、腕時計を見て、

若林「6時前か。さすがに人はいないな」

星空

ハムスターランド前、早朝

奥のハムスターランド入り口付近に人影。

若林「あ、人がいる、こんなに早く。・・・そうか、動物だからな。大変だな、生き物の世話は」

少女が一生懸命にハムスターの世話をしている。

距離があつて若林には気が付かない。

若林遠ざかり出口へと向かう。

美しい白樺湖の全景、早朝

白樺湖の全景

観光客でこった返している。

山道

4 駆で走る若林。

同、標識

『女神湖直進2km』と書いてある。

女神湖、立科牧場

観光客で一杯である。

同、ペンション通り

多くの人。ゆつくりと走る4 駆。

4 駆、内

慎重に運転する若林の顔。

若林「女神湖ねえ。これじゃロマンチックどころじゃないな」

女神湖畔

車止めに4駆を止めて、アイスクリームを食べながら湖を眺めている若林。

若林「昼はだめだな。今晚もう一度来てみよう」

若林、車に乗りエンジンをかけて勢いよくバックする。

白樺湖の全景、夕方

若林の部屋の灯が見える。

若林が出てきて4駆に飛び乗る。

山道、夜

走る4駆。

同、車の内

運転する若林の顔。

若林「昼と夜とじゃ大違いだ」

女神湖畔、夜

車止めに4駆が走り来たり止まる。
他に誰もいない。

同、車の内

夜空を見上げる若林。

若林「すごい！なんて星だ」

夜空

満天に輝く星群。

流れ星が時々流れる。

若林の声「すばらしい。天に手が届きそうだ」

変わった娘（こ）

レジャーランド、早朝

ジョギングする若林。

同、遊戯エリア、

若林、遊戯エリアにさしかかる。

同、ハムスターランド入り口、早朝

晶子、ハムスターの入ったプラスチック
ケースを運び出している。

一つ一つ語りかけながら楽しそうである。

若林には気が付かない。

若林、立ち止まり足踏みしている。

若林、そつと近づく。

晶子、まだ気が付かない。

若林、一呼吸して、

若林「おはよう！」

晶子、びっくりして振り返る。

晶子、ハムスターをかばって恐怖の表情。

若林「あ、ごめん・・・」

若林、すぐに背を向けて走り去る。

恐怖の表情のまま、じっと見送る晶子。

池の山ホテル社員食堂、内

隅で食べている若林。

北山がトレイを持って隣に座る。

北山「おう、弟よ。どうだ？いい小説書けそうか？」

若林「ああ、なんとか・・・。それより今朝早くに。

ジョギングしてたら。ハムスターランドの女の子。
あいさつしたら、6時ごろ」

北山「朝6時？」

若林「ああ、毎朝彼女だけに会った。賢明にハムスター
の世話をしている。三日目に始めてあいさつした」

北山「あ、知ってる。朝から晩までハムスターの世話を
している、ちよつと変わった娘。人間嫌い

じゃないか？ほんと、友達もいないみたいだし。
24時間ハムスターべったりの子だよ」

若林「今朝始めて、おはようってあいさつしたら、ごく
普通にだよ。彼女、びっくりして、のけぞって、
ハムスターを後ろ手にかくまって、ものすごい

恐怖の表情をしたものだから、俺、とまどっち
まってごめんと叫んですぐ走り去ったんだが、
なんだかとても悪いようなことをしたみたいで」

北山「気にすんなよ。ちよつと変わった子なんだから。ハム
スターを取られるとでも思ったんだろ。じゃあな」

北山、トレイを持って去る。

若林「ちよつと変わった娘か・・・。」

変わった娘（こ）（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしくお願いします。

晶子（前書き）

これはシナリオです。

晶子

女神湖畔、夜

車止めに4駆がとまっている。

星空を眺めている運転席の若林。

美しい星空

若林の声「綺麗な星だ。はしごをかければ
天まで届きそうとはこのことだな」

美しい星空と4駆のシルエット

星空が次第に曇ってくる。

レジャーランド、内、早朝

濃い霧の中、ジョギングする若林。

同、遊戯エリア、早朝

濃い霧の中遊戯エリアにさしかかる若林。

若林「今日は避けて通ろう・・・」

濃い霧の中から晶子が現れる。

晶子「おはようございます。・・・」

昨日はほんとにすみませんでした」

若林、立ち止まり振り返る。

若林「おはよう」

晶子「斉藤晶子といいます。昨日は急に声をかけ
られたので、ほんとにびっくりしちゃって」

若林「こちらこそ、申し訳ない」

晶子「神奈川県の川崎から来てるんです。

今年で2年目。小学生のときからハムスターがとても好きで、ほんとに自分でもどうし

ようもないんです。一人一人名前をつけて、色んなおしゃべりをしていると、一日があつという間に過ぎてしまっんです」

若林「ごめんなさい。夢中でお話されてる時に突然声をかけてしまって」

晶子「いいえ……。あの？」

若林「あ、若林ていいいます。小説書いてるんですが、親友の北山がここの支配人やってて……9月末までここにいます」

晶子「そうですか。これからも毎朝ジョギング、がんばってください」

若林「ありがとう。じゃ、ハム君たちによろしく」

手を上げて若林、濃い霧の中を走り始める。

ボーリング場、内

一人でボーリングする若林。

坂道、夕

坂道を上る若林。

寮、浴室、内、夜

湯船につかっている若林。
思い出し笑いをする。

若林「ジヨギング頑張ってください、か」

イメージ

霧の中の晶子の美しい顔。

晶子「ジヨギング頑張ってくださいね」

寮、浴室、内、夜

湯船につかっている若林。

若林「よし、がんばるぞ！」

若林、大きく息を吸って湯の中へ潜る。

晶子（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしく願います。

楽焼（前書き）

この作品はシナリオです。

楽焼

レジャーランド、内、早朝

若林がジョギングをしている。

同、遊戯エリア、早朝

晶子が向こうに見える。

若林が現れ、走りながら、

若林「晶ちゃん、おはよう！」

晶子「おはようございます」

若林「ハム君たちによろしく！がんばってね」

晶子「ありがとうございます。がんばります」

二人手を振り笑う。

若林、走り去る。

晶子、ハムスターに手をやり。

晶子「ハムリン！昔の大好きだった頃の

パパが帰って来たみたいね（笑む）」

楽焼教室、外

レジャーランド内の楽焼教室。

看板が出ている。

『楽しい楽焼』

同、内

若林が楽焼に挑戦している。

他に何人かの客。

先生らしき老人が若林を覗き込む。

若林「どうですかこれ？ハムスターに見えますか？」

先生「ハムスター？これはどう見ても……」

若林「だめですか？」

先生「この脇にハムスターと書かれたほうが……」

若林「そうですか。それじゃ、ハムスターアッキー
と書いておきましょう、ハハハ」

狸のようなハムスターの置物。

レジャーランド、内、早朝

楽焼を持って走る若林。

同、遊戯エリア、早朝

向こうに晶子の後姿が見える。

若林が現れる。

若林「おはよう晶ちゃん！これおみやげ！」

晶子、振り向き、

晶子「おはようございます。おみやげ？」

若林「これ、私が作りました」

若林、楽焼を晶子の目の前に差し出す。

晶子、まじまじと楽焼を見つめ、

恐怖の表情に変わる。

若林、楽焼を背後に隠す。

若林「ごめん。何かあるんだね？」

心苦しいことが何か？」

晶子、無言でうなづく。

若林「よし、じゃきょうの夕方出口で待ってる」

晶子、大きく息を吸って無言でゆっくりとうなづく。

若林、若林、目で確認して走り去る。

晶子の目に大粒の涙。

楽焼（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしく！

事故死？（前書き）

この作品はシナリオです。

事故死？

女神湖畔、夜

美しい満天の星空。

車止めに4駆が止まっている。

同、車の内、夜

若林と晶子が話している。

若林「この女神湖はね、戦国の頃には姫が淵

という沼だった。武田の荒武者に追われた
諏訪城の美しい姫がこの沼に身を投げた。

ところがその瞬間、たくさんの蝶が大空へ
と舞い上がり、その中にひととき大きな美
しい蝶がいた。

きっとそのお姫様だったんだろうね。

天然記念物の大ムラサキはその末裔だ」

晶子は黙って聞いている。

その目に涙。

若林「今では女神湖と呼ばれて、百年に一度、

天空から女神が舞い降りて来るそうだ。

・・・僕が作った伝説だけどね」

晶子「私・・・父を殺したんです。七年前。

・・・小学校6年生の時」

若林「・・・そう」

晶子「大きなハムスターの焼きものを父に投げつけて。父は階段を転げ落ちて死にました。私が殺したんです」

イメージ

7年前の晶子の家の玄関。

階段下に父斉藤秀夫が頭から血を流して倒れている。粉々になった陶器の破片。

血だまり。目をむいた斉藤の横顔。
脇に母英子が泣き崩れている。

晶子の声「母がかばってくれて警察も医師も忙しい時と重なり、すぐに事故死として処理されました。泥酔による転落ショック死。

致命傷は側頭部の陥没でした。打ち所が悪く焼き物が頭の上で粉々に砕けていたそうです。

私は重いその焼き物を投げつけた反動で部屋の中に倒れてしまい、気絶していました」

若林「・・・なるほど」

晶子「すぐ気が付きましたが、下から母の『下りてこないで！』と言う絶叫が聞こえ、すぐに隣のおばさんが駆け込んできて」

イメージ

7年前の現場。

母英子が泣き崩れている。

玄関のドアが開いて隣のおばさんが
駆け込んでくる。

おばさん「どうしたの奥さん？ああっ！」

英子「主人が階段から転げ落ちて・・・」

打ち所が悪かったみたいです。すみません、
救急車と警察を呼んでください」

事故死？（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もご覧ください。

ハムリン（前書き）

この作品はシナリオです。

ハムリン

女神湖畔、夜

元の4駆の内。

若林と晶子が話している。

若林「そうか。それじゃ晶ちゃんは倒れた

お父さんを見ていない？」

晶子「ええ、見ていません。怖くて震えていました」

若林「やはりそれは事故だったんですよ。

自分を責めてはいけません」

晶子「母もずっとそう言ってくれますが、
焼き物を投げつけたのは私ですし」

若林「うん？」

晶子「えっ？」

若林「だから僕の作ったハムスターの楽焼に」

晶子「そうです、一瞬その時の光景が目には浮び・・・」

若林「始めて声をかけたときの驚きようも、

昔のお父さんに僕がよく似てたからですか？」

晶子「・・・」

若林「そうみたいです。しかし何で又そんなに、

お父さんを憎んでいたのかなあ？」

しばらくの沈黙の後、

晶子「7年前、父と母の了解を得て、ハムスターを

買ってもらったんです、初めて。
その頃はとてもいい父でした」

回想、晶子の家、居間

小学生の晶子と両親が、ハムスター
の入ったかごを見ている。

秀夫「かわいいな」

英子「とてもかわいい。見飽きないわ」

秀夫「名前は？」

英子「もう晶子を買う前から決めてるわ。ハムリンよね」

晶子「そう、初代ハムリン」

秀夫「ハムリンか、ハハハ」

家族3人幸せが一杯。

回想、晶子の家、玄関、内

秀夫が玄関のドアを開けて入ってくる。

晶子と英子が迎えに出る。

秀夫「ただいま」

晶子と英子「おかえり、おとうさん」

秀夫、手の包みを晶子に渡す。

秀夫「これ、ハムリンのおもちや」

晶子、包みを開ける。

晶子「まあ、かわいい。ありがとうお父さん」

秀夫と英子、微笑む。

晶子のN「はじめは父もハムリンをとても可愛
がつていて、ほんとにいい父親でした。
ところが3ヶ月程した頃・・・」

回想、家、居間、夜

英子と晶子が食卓の準備をしたまま、
父の帰りを待っている。

英子はテレビを見ている。

晶子はハムリンと戯れている。

英子「おそいわね。何かあったのかしら？」

晶子「大丈夫よ・・・ほら帰って来た」

ピンポンになる。

二人すばやく玄関へ向かう。

ハムリンは晶子の手の中

ハムリン（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしく願います！

降格（前書き）

この作品はシナリオです。

降格

同、玄関、内、夜

泥酔の秀夫。

英子「まあ、どうしたの？」

晶子「お父ちゃん！」

ハムリンが晶子の手の中から飛び出る。

秀夫「仕事に失敗した。左遷だ」

秀夫、崩れ落ちる。

ハムリンが秀夫の手の近くに行く。

秀夫、ハムリンに手を伸ばす。

ハムリン、キツと声を上げ、

秀夫の指を噛み首筋へ駆け上がる。

秀夫「いたっ、かまれた！」

英子「まあ、晶子！ハムリンを早く捕まえて」

晶子、ハムリンをそっと捕まえ奥へ。

英子、しゃがみ込んだ秀夫の上着を脱がせながら、
英子「大丈夫よ、くびになったわけじゃないんでしょ？」

秀夫「ああ、くびじゃないが、今度のプロジェクト、こっ
そり出し抜かれた。部下の蓮尾がチーフに抜擢。
俺は降格だ。このままじゃとても耐え切れない」

秀夫、がっくりと肩を落とす。

x x x

会社、調査室、外

調査室斉藤と書いてある。

同、内

斉藤秀夫が窓際に座っている。

ノックの音。

秀夫「どうぞ」

ドアを開けて美人の山上陽子がお茶を運んでくる。

陽子「このたび調査室と資料室の担当になりました、

山上陽子です。よろしく願います」

秀夫「そう。資料室の山本さんは来年定年だったよな」

陽子「お呼びになれば御茶やコピーのお手伝いを

するようにといわれています」

秀夫「分かりました。山下新総務に、ありがとう

ございますと伝えといてください」

陽子「かしこまりました」

陽子、礼をして出て行く。

秀夫「山下と蓮尾とは同期のはずだ。完全に、

後輩に出し抜かれた」

秀夫、じつと窓の外を見る。

電話が鳴る。

受話器を取る秀夫。

交換の声「山菱商事の田中様からお電話ですが繋がりますか？」

秀夫「山菱の田中か、早耳だな。ああつないでくれ」

田中（電話の声）「斉藤元気か？お前のこと聞いたぞ。

出世頭だったのになあ。とにかく話し聞かせろよ」

秀夫「ああ、わかった」

降格（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしく！

乗っ取り（前書き）

これはシナリオです。

乗っ取り

焼肉屋、内、夜

個室で秀夫と親友の田中、佐藤が
焼き肉を食べている。

田中「それはひどいよなあ。プロジェクトごと
ごっそりと出し抜かれたとなりや」

佐藤「メンバーにスパイがいたとは思えない」

秀夫、えっという顔をして二人を見つめる。

田中「蓮尾ってどんな奴だ？」

秀夫「それはない。俺のミスを尻拭いしてくれた奴だ」

佐藤「そういうのに限って危ないんだぞ」

田中「お前は人がいいからな」

秀夫「……」

会社、調査室、内

窓際に秀夫が座っている。
電話が鳴る。

秀夫、受話器を取る。

交換の声「専務がお呼びです」
秀夫「専務が？すぐ行きます」

秀夫、出て行く。

X X X

秀夫、帰ってくる。

手に分厚い茶封筒を持っている。
ゆっくりと後ろ手にドアを閉めながら、

秀夫「蓮尾が?・・・」

秀夫、封筒を机の上に置き、座る。
ノックの音。

秀夫「どうぞ」

陽子がお茶を持って入ってくる。
机上の茶封筒に目をやりながら、

陽子「お茶をお持ちしました。調査ですか?

有能な方はどこにいらしても忙しくなりますね」

陽子、お茶を机上に置く。

秀夫、茶封筒をしまいながら、

秀夫「あ、いやいや・・・」

陽子「頑張ってください斉藤さん。応援してます」

秀夫「ありがとう」

陽子、礼をして出て行く。

秀夫「乗っ取りか。徹底して暴いてやる」

秀夫、電話を取りプッシュを押す。

秀夫「斉藤と申します。田中課長をお願いします」

X X X

田中の声「気をつけろよ斉藤。よほど慎重にやるんだ。

1歩間違えれば殺されることもありうるぞ。

この電話も盗聴されてると思え」

秀夫「そんな？」

秀夫、受話器を押さえドアを見る。

ドアの外、人影が去る。

秀夫の首筋に紫色の斑点が浮き上がっている。

秀夫、首筋を掻く。

乗っ取り（後書き）

映画村きりもんじブログもよろしく！

陽子（前書き）

この作品はシナリオです。

陽子

レストラン、内、夜

秀夫が一人でテーブルに座っている。
陽子が来て向かいに座る。

陽子「お待たせしました」

秀夫「いやいや。急にお呼びだてして、
彼氏に迷惑じゃなかったかな？」

陽子「彼氏なんていません・・・」
ワインが来る。

陽子「大事なお話して何でしょうか？」

秀夫、ワインを一口飲んで、
陽子の瞳をじっと見つめる。

秀夫「ずばり。君は蓮尾のスパイだろう？」

陽子「えっ？何のことでしょうか？」

秀夫「蓮尾のスパイだろう？君は？」

陽子「蓮尾部長は私の最も嫌いなタイプなので、
絶対にそれはありません。私、帰ります」

秀夫「ちよつと待って。間違いないよね？」

陽子「絶対にそれはありません」

秀夫「分かった、謝る。申し訳ない。
疑ってごめん。飲みなおそう」

陽子「山下総務から、誰か調査室と資料室の担当になる者はいないか？と言われた時、すぐに私が手を上げたんです」

秀夫「そうだったのか。ありがとう」

二人、ワインで乾杯する。
ディナーのワゴンが来る。

ホテルの部屋、夜

ベッドの上に秀夫と陽子。
首の傷を見つめる陽子。

陽子「この傷どうされたんですか？」

秀夫「この間ハムスターに噛まれたんだ。

この手の指もそうだよ、ほら」

秀夫、手の指を見せる。

陽子「・・・」

陽子、じつと手の指を見つめている。

秀夫「大丈夫だよ、このくらいの傷」

陽子「一月ほど前、ネズミに噛まれて男の人が亡くなったと言った記事を見ました。外国の話でしたが、えっネズミにと思ってよく読んでみたんです」

秀夫「・・・で？」

陽子「何とかというウィルスに噛まれると、人の体内に抗体ができるんですって。普通の人だとアレルギー程度で済むのに、数百万人に一人位、ショックで死ぬことがあるそうです」

秀夫「ほう、ぼくの体の中に抗体ができている」

陽子「ウィルスを持ったねずみにかまれたらの話です。ショック死はさらに数百万人に一人。まずここでは起こりえませんが」

陽子、二つのグラスに水を注ぎ錠剤を入れる。

陽子「これを入れて飲むと二時間で八時間分の睡眠が取れます。ゆっくり休みましょう」

秀夫、うなずき、二人グラスを空ける。

陽子（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしく！

英子（前書き）

この作品はシナリオです。

英子

病院、外

遠藤皮膚科の看板。

同、診察室、内

院長の遠藤が秀夫を診察している。

遠藤「こういうものは8割がた心因性のものでして、アトピーもこのような斑点もストレスからのものがほとんどです。心を鍛えないと。

ストレスに負けてはいけません。ウイルス抗体なんていうのは万に一いや、それ以上にもありえません。念のため血液を精密検査に出しますが、1ヶ月はかかるでしょう」

秀夫は黙って聞いている。

晶子の家の居間、夜

電話が鳴っている。

英子が出る。

英子「はい、斉藤です。田中さん？あの、主人の同級生の？ええ、ここ数日帰ってません。大事な調査で泊り込みだそうです。秘密の仕事だそうです、

連絡は昼間しかつきませんが……。えっ！危険？命が狙われている？」

電話ボックス、内、夜

田中、電話をかけている。

田中「ええ、アシスタントの山上陽子という女性、私の勘ではスパイだと思います。斉藤が丸め込まれておるみたいで、主犯格は蓮尾部長。裏で住吉商事が糸を引いています。

業界通の話では乗っ取りはもう時間の問題で、専務派の巻き返しに斉藤が極秘情報を調べ上げれば、そうさせないために斉藤は非常に危険な立場にいるというわけです」

晶子の家の居間、夜

英子が電話をしている。

英子「女性が絡んでいるんですか？・・・わかりました」

英子、怖い顔をして受話器を置く。

背後に二階からそつと降りてきた晶子が立っている。

晶子の家、外

大洋生命と書いた軽自動車が止まる。

保険のおばさんが下りてくる。

カバンを確かめ玄関へ。

同、玄関、内

保険のおばさんと英子が話している。

保険屋「この子供保険はもうすぐ満期になります。ご主人の保険も下取りして、1億円の大型保障に変更されたいかがですか？」

英子「今いくらなの？」

保険屋「病死で3千万。事故で6千万の保障ですが」

英子「そう、6千万円ね。考えとくわ」

英子（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしく！

不倫（前書き）

これはシナリオです。

不倫

道、夜

陽子が運転する車が止まっている。

同、車の内、夜

陽子と酔った秀夫が話している。

陽子「今日は帰る日ですよ」

秀夫「分かってる」

陽子「これを飲んでいってください。ぐっすり眠れます」

陽子、コップに錠剤を入れかき回す。

錠剤はいつもより多い。

秀夫は外を見ている。

秀夫「家はすぐそこだから、ここから歩いていくよ」

陽子「これ、一気に飲んでください」

秀夫、一気にコップを空ける。

道、夜

陽子が運転する車が止まっている。

一気にコップを空ける秀夫が見える。

英子、歩いてきて車の中の秀夫に気づき隠れる。

車のドアが開いて秀夫が下りる。

車、ゆっくりと動き出し遠ざかる。

疲れた足取りで、秀夫歩き出す。

英子、ゆっくりと秀夫に近寄る。

英子「今の人だれ？」

秀夫「ああ、お前か。見てたのか？」

英子「ええ、ちょうど通りかかって……。きれいな人ね」

二人歩き出す。

秀夫はだいぶ酔っている。

秀夫「仕事を手伝ってもらってる」

英子「……」

秀夫「秘書だ」

英子「うそよ。スパイよ、あの人。」

もうすぐ乗っ取られるわ、あなたの会社」

秀夫「なんだって？何故お前そんなことを知ってるんだ」

英子「田中さんから昨日の夜電話があって、気をつけてくだ

さいだつて。今日、あなた一日会社にいなかったでしょ

う。今頃あの女が調査室の資料を全部盗み出してるわ」

秀夫「バカなことばかり言うなよ」

秀夫の首筋に紫色の斑点が浮ぶ。

晶子の家、玄関、外、夜

やるせない怒りの表情で玄関に立つ秀夫。

その後ろに英子。

不倫（後書き）

「映画村きりもんじブログ」よろしく！

事件（前書き）

これはシナリオです。

事件

晶子の部屋、夜

ハムリンと戯れている晶子。

ゲージを開けてハムリンを外に出す。

駆け回るハムリン。

晶子の家の階段、夜

元気一杯階段を下りるハムリン。

晶子、上から声をかける。

晶子「ハムリン、ハムリン！そこ行っちゃだめ！」

同、玄関、内、夜

玄関のドアが突然開く。

立ち止まり驚くハムリン。

秀夫が入ってくる。

秀夫「もういいじゃないか、そんな事」

英子も入ってくる。

晶子「（2Fから）お帰り。あつハムリン！」

ハムリン、秀夫に飛び掛り噛み付く。

秀夫「あつ、このやろう。畜生、ネズミまで俺をバカにしやがって」

ハムリン、飛び降り階段へ。

秀夫、よろめきながら靴を脱ぎあがる。

秀夫「くそっ」

晶子「（二階からの声）ハムリン、こっち！」
英子「あなた！」

同、階段、夜

恐ろしい形相で階段を這い上がる秀夫。
秀夫「殺してやる」

必死で駆け上がるハムリン。

晶子「ハムリン、早く中へ入って！」

同、晶子の部屋、夜

奥のゲージへ飛び入るハムリン。
後ろ手にかばって階段を見つめる晶子。

脇にハムスターの置物がある。

晶子、手にとって頭上に構える。

額から血を流しものすごい形相で秀夫が現れる。
その瞬間目をつぶって思い切り陶器を投げつける晶子。
晶子、そのままひっくり返り気絶する。

秀夫「わーっ！」

階段を転げ落ちる大きな音。

階下の英子の絶叫、

英子「キャーッ！下りてこないで晶子！来ちゃだめよ、キャーッ！」

同、玄関、内、夜

階段下に秀夫が横を向いて頭から血を流し倒れている。
頭上と回りには粉々になった陶器の破片と血だまり。

脇で英子が泣き崩れている。

玄関のドアが開いて隣人が駆け込んでくる。

隣人「どうしたの奥さん？あっ」

隣人、異常な状態に気づく。

英子、放心状態で立てない。低い声で、

英子「主人が階段から転げ落ちて。打ち所が悪かったみたい、

すみません、救急車と警察を呼んでください」

隣人「あっ、はい」

隣人、慌てて玄関を出て行く。

事件（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしく！

逮捕（前書き）

これはシナリオです。

逮捕

夜の街

救急車とパトカーのサイレンの音。

晶子の家、外、夜

救急車とパトカーが止まっている。

人ばかり。単価で担ぎ出される秀夫。

同、玄関、内、夜

階段下で刑事が調べている。

刑事「泥酔による転落ショック死か。救急隊の医師もそう言ったな。

下から見ていた妻の話では、ハムスターの陶器を柱と

間違えて掴んだのか。まさかさまだな。ふむ、陶器をこう両手で掴んだまま頭上からか、まちがいない」

刑事、両手を頭上に上げ落ちる格好をする。

病院、外

遠藤皮膚科の看板が見える。

同、診察室、内

院長の遠藤が検査書を見ている。

遠藤「数百万人に一人あるかないかのハムスター
アレルギー体質の可能性あり。二度目に嚙

まれた時が一番危険なので要注意。

同じハムスターに絶対近づかないこと。
海外にてショック死の例あり・・・か」

遠藤、顔をしかめる。

会社、調査室、内

蓮尾部長と山下総務、山上陽子がいる。

蓮尾「皆、ご苦労だったな」

山下「いえいえ、殊勲章は山上君ですよ」

陽子「私はただ資料をちよっとお借りしただけ。
他には何もしていませんよ」

廊下に足音、緊張が走る。

ドアが開いて数人の検察官が入ってくる。

検察官「蓮尾敦、山下はじめ、山上陽子を秘密漏洩
及び背任の容疑で逮捕します」

検察官、逮捕状を広げる。

他の検察官が3人に手錠をかける。

驚き啞然とする3人の顔。

美しい星空

きらめくばかりの星。

時々流れ星が横切る。

逮捕（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしく！

ママ（前書き）

これはシナリオです。

ママ

元の女神湖畔、夜

美しい星空。

車止めに四駆が止まっている。

同、車の内

若林と晶子が話している。

若林「そうだったのか。僕が昔のパパによく似ていたから。

その贈り物のハムスターの置物がそっくりだったから、か。

父親なんて考える事が同じなのかな。生きておられたら又復活して新たなプロジェクトを立ち上げておられたらうに」

晶子「いえ、ハムスターと相性が悪ければ同じことです」

若林「その後、おかあさんは？」

晶子「元気で働いています。明日夕方ここに訪ねて来ますので、

一緒にお食事しましょう。ね、若林さん？」

若林「ええ、分かりました」

晶子、うれしそうに微笑む。

星空がとても美しい。

レジャーランド、出口、外

若林が一人立っている。

蛍の光のメロディーがなっている。

帰りの客が出てくる。

晶子が出てくる。

晶子「おまたせ」

二人並んで向かいのレストランの方へ歩いていく。

レストラン前の駐車スペース

若林の四駆が止まっている。

二人立ち止まる。

若林「ちよつと早かったかな？」

晶子「ううん、ママもう着く頃。あ、きた」

濃い小豆色のジャガーが入ってくる。

ゆつくりと二人の前に止まる。

ドアが開いてスカーフにサングラスの

英子が下りてくる。

晶子「ママ、こちら小説家の若林さん」

若林「はじめまして、若林勝秀です」

英子「晶子の母です。はじめまして。若い頃のパパに似てるわ」

晶子「そうですよ。私も最初びっくりしちゃった」

英子「明るくなったわね、晶子」

晶子、にっこり笑って、

晶子「おなかすいた。早く何か食べようよ」

晶子、英子の手を引いてレストランへ向かう。

ママ（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしく！

真相？（前書き）

これはシナリオです。

真相？

レストラン、内

三人で食事をしている。

晶子「・・・というわけで、全部若林さんに話したの。
そうしたら気持ちがつつとして、元気になれたの」

英子「なるほどね、よく分かったわ。

若林さん、ご苦労様でした」

若林「いえいえ。・・・で、お母さんは今？」

英子「私は今ブティックを3軒抱えて大変。恋する暇もないわ。

それというのも、死んだ主人のおかげだけどね」

英子、タバコに火をつける。

英子「今のお金で1億円。保険と退職金で手に入った多額の現金。

新しい人生に全てを切り換えたわ。一度しかない自分の人生。

思い切りが必要と。そして今の男勝りの私がある。

こんなじゃなかったよね晶子、昔のママは」

晶子「そうよね。外では何もできない専業主婦そのものだったよね」

英子「人って変わるもの。ある瞬間からすべてが」

若林「ある瞬間？」

英子「そう・・・ある瞬間から」

英子、遠くを眺めタバコの煙を吐く。

若林と晶子、顔を見合わせる。

英子「主人を殺したのは私よ」

若林と晶子「えっ？」

英子、タバコの火を消しながら、

英子「秀夫が階段から落ちた時はまだ生きていた。ハムスターの陶器を胸に抱えて横顔を床に強く打ちつけ気を失っていた。私は思わず大声で叫んでいたわ」

回想、晶子の家の玄関、内、夜

絶叫の英子。

英子「キヤーツ！下りてこないで晶子！来ちゃだめよ！キヤーツ！」

階段下に秀夫が顔を横にして倒れている。
血は流れていない。

秀夫は胸にハムスターの陶器を抱えている。
脇に英子が立っている。

英子「とつさに私は秀夫の胸の置物を高々と持ち上げて、
思い切り秀夫の側頭部にたたきつけた」

秀夫の胸の置物を両手で取り上げ、
ものすごい形相で叩きつける英子の顔。
瞬間目をつむる。

英子「ぐしゃっという鈍い音が聞こえて、陶器は粉々に割れた。私は流れ出る血だまりにへたり込んだ」

粉々の破片。
血だまりにへたり込む英子。

玄関のドアが開いて隣人が駆け込んでくる。

隣人「どうしたの奥さん？あっ？」

隣人、異常な状況に気づく。

放心状態の英子の顔。

真相？（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしく！

ショック死（前書き）

これはシナリオです。

ショック死

元のレストラン、内

若林と晶子、英子の話に聞き入っている。

若林、身を乗り出して、

若林「ほんとですか？それ！」

英子「うそよ。うそうそ！ほほほ」

急に笑い出す英子。

英子「泥酔と転落による心臓急停止。ショック死だったのよ、まちがいなく。秀夫はその頃調査に忙しく、毎日

睡眠薬を飲んでたみたいだし。相当心臓が弱っていた。運が悪かったのよ、ハムリンに噛まれて」

若林「・・・・・・」

晶子「とにかくママはその一瞬に全てが変わった」

英子「その通りよ。家庭に縛られた弱い主婦をやめて、強い信念を持った新しい女性が誕生したのよ」

若林「その一瞬に全てを変えた。なるほど、よく分かりました」

若林、ステーキにかぶりつく。

英子と晶子、微笑んでそれを見ている。

女神湖畔、夜

美しい星空。

車止めに若林の四駆が止まっている。

若林の声「夏の終わりにハムスターランドは撤収した。
晶子は何もいわずに去っていった」

池の山ホテル、社員食堂、内

隅で食べている若林。

北山がトレイを持って隣に座る。

北山「おう、どうだ？小説書けるか？」

若林「ああ、なんとか」

北山「女神湖伝説、北山虎之助。どうだ、俺の芸名だ。
たのむぜ。映画化されたら俺本人が出るからな、ハハ」

病院、外

遠藤皮膚科の看板が見える。

同、応接室、内

院長の遠藤と木村刑事が話している。
テーブルの上に検査書がある。

遠藤、検査書を手にして、

遠藤「ええ、可能性としてはありますが、そのためには、
もう一度、精密な血液検査をしてみないと」

木村刑事「検死の解剖の結果だけでは、そこまでは分かり
ませんでした。死んだ斉藤の胃の中から大量の睡眠薬
が出てきたことと、もう一つは打ち所が悪く、自らの
側頭部に陶器が当たり砕けたといっても致命的なほど
陥没はしていませんし、失血死でもありません。転落
のショックによる心肺停止というのが結論でしたが」

遠藤「恐らくそれは間違いないでしょう」

木村刑事「数日来のストレスと過労に突発的な出来事が重なり
転落シヨック死。やはり妥当な線ですな」

遠藤、タバコに火をつけ、

遠藤「その時の斉藤さんの血液があれば、ネズミアレルギー
かどうか分かりますが」

木村刑事もタバコに火をつける。

木村刑事「もう日がたってますのでねえ」

遠藤「しかし二階から投げつけたのならともかく、一緒に

落ちたくらいであの陶器が碎けるものですかね？

柱と間違えて二階の陶器をつかみそのまま逆さま、

と言っても恐らく陶器は胸か腹部あたりで、

頭それも側頭部というのはやはり不自然です。

可能性はほとんどありません」

ショック死（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしく！

夜明けのボサノバ（前書き）

これはシナリオです。

夜明けのボサノバ

木村刑事「可能性はほとんどないとしたら、
何故陶器は側頭部にあたった？」

遠藤「もし側頭部にあたったとしても、同時に二階から落ちて
いるので粉々になるほどのGはかかってないはずです」

木村刑事「となると、誰かが二階から投げつけたか、あるいは思いつ
きり陶器を頭上に持ち上げて力任せに投げ下ろしたかですね」
遠藤「そうなりますか」

木村刑事「階段を陶器を持ったまま落ちてみると分かりますが」
遠藤、タバコをもみ消して、

遠藤「そうですか。どうやって実験するか又今そこまでしても、
シヨックによる心肺停止という直接的な死亡原因はくつがえ
りません。大騒ぎして徒労に終わる可能性のほうが大ですな」

木村刑事、タバコをもみ消す。

木村刑事「そのとおりです。いや、よく分かりました。お忙しい
ところほんとにありがとうございます」

遠藤「いえいえ、何の力添えにもなりませんで。
又何かあったらいつでもお越しく下さい」
木村刑事、礼をして去る。

道

木村刑事が歩いている。

木村刑事「それにしても妻の英子は、救急車と警察を同時に呼んでくれと頼んだ。事故なら救急車だけでいいはずだが？なぜ、警察も・・・わからん。・・・ま、いいか」

霧が峰の山なみ

美しいビーナスラインを若林の四駆が走っている。

若林のN「9月に入ってすぐに晶子から手紙が来た。住所は書いてなかった。今は母のブティックを手伝っているとのこと。もう二度とハムスターは飼わない事を二人で約束して・・・」

車山高原

ビーナスラインの夕景色。

遠くに若林の四駆が見える。

若林のN「芯の強い女性。一本立ちした女性は魅力的だ。でも、人間味はあって欲しいな・・・女神湖のように」

美しい白樺湖の遠景

四駆が一台走っている。

- 完 -

テーマ曲『夜明けのボサノバ』

夜明けの霧の中 二人だけ何も見えず
手探りで掴んだ心の灯火 今はただ胸の中

白樺の森の影 あなただけ何も見えず

手が触れて心ときめき 後はただ霧の中

昔も今も未来も 白樺の泉のほとり
不思議な恋の物語 今もまだ夢の中

今もまだ夢の中 今もまだ夢の中

夜明けのボサノバ（後書き）

「映画村きりもんじブログ」もよろしく！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1956g/>

ハムスターランド（私は何も見ていないシリーズ2）

2010年10月10日22時52分発行